

平成 20 年度 事業報告書

平成 20 年 4 月 1 日から平成 21 年 3 月 31 日まで

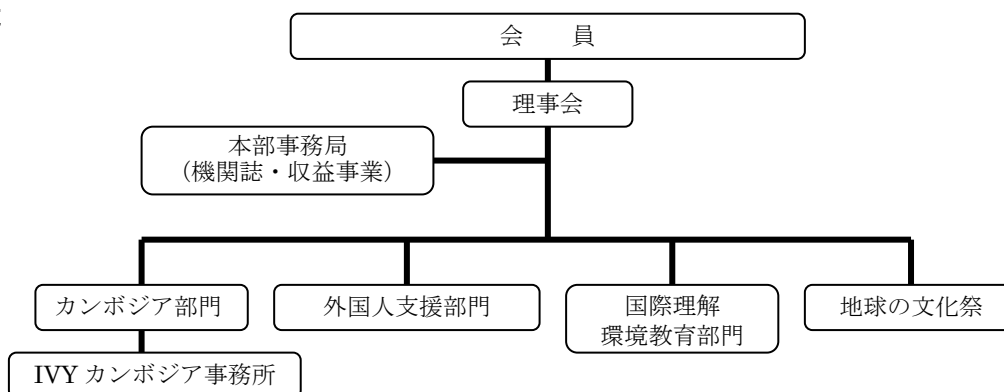
特定非営利活動法人 国際ボランティアセンター山形

IVYは、1999年6月、NPO 法人として新たなスタートを切るにあたり、任意団体として活動してきたそれまでの実績を活かし、活動がより一層の広がりや深まりを持つために08年度までの長期活動方針として「実践する」「コーディネートする」「情報蓄積と研究ファシリテイトする」「つながる」「提言する」という6つの柱を定め、活動してきました。

結果、会員やボランティアの若返りや、各部門とも活動の成熟が見られ、その事業は関係各所から高い評価を得ることができ、この10年間の活動目標は達成できたのではないかと思います。しかし、それらの活動を支える財政面は、06年度から3年連続で赤字決算となり、資本金が99年法人化当時に比べ半減するなど、危機的状況となりました。

そこで、団体を上げて 2007 年度に引き続き、ファンドレイジングと財政基盤の強化に取り組んでいるところですが、残念ながら目に見える成果を出せるまでには至っていません。

組織



役員

理事	安達三千代、阿部真理子、枝松直樹、小野修、齋藤寿子、柴田けい子、菅井規郎、西上紀江子
監事	佐藤権一郎

部門責任者

部門	責任者
理事会	枝松 直樹(代表理事)
カンボジア部門	安達 三千代(理事・事務局長)
外国人支援部門	西上 紀江子(理事)
国際理解・環境教育部門	阿部 真理子(理事・事務局)
地球の文化祭	菅井 規郎(理事) 堀野 正浩(事務局)
本部事務局	安達 三千代(理事・事務局長)
IVY カンボジア事務所	松浦 あゆみ(プロジェクトマネージャー)

会員 (計 105)

個人会員	96 (一般会員 77、学生会員 19)
企業・団体会員	9

IVY は、2007 年 4 月から「国際協力 NGO 次世代リーダー育成事業」(下記参照)の 2 年間の助成金の獲得をきっかけに、財政基盤の安定化を目的としたファンドレイジング(資金・寄付金調達/開拓)に取り組みました。詳しくは「別添資料 1」をご覧ください。

実施期間	2007 年 4 月～2010 年 3 月(3 年:うち助成対象期間は最初の 2 年)
目 標	2009 年度末(助成終了年度)までに、 1) 自己資金比率を全収入の 40%に引き上げる 2) 会員口数を現在の 2 倍に増やす
活 動	1) 企業会員の獲得: 地域企業への積極営業 2) 個人会員の獲得: イベント、スタディツアー参加者の勧誘 3) 収益事業の収入増: アジア雑貨等の委託販売先の開拓 4) 寄付金収入の増: 講演会や募金キャンペーンで寄付金を増やす
実施体制	助成対象者 1 名が、本事業の研修で得たビジネススキルと団体が有する地域のコネクションを活かし、積極的な営業・勧誘活動を行う。特に企業会員の獲得と寄付金の増収にフォーカスした活動を展開する。助成対象者がファンドレイジングに専念するため、スタッフを一人増員する。
計 画の修正	助成対象者の退職により、08 年 8 月に計画を修正。アプローチ方法を見直した。知名度を上げる広報活動や心理的・金銭的に負担が少ない参加メニューの開発などに重点を置いた。
結 果	目標 1: 自己資金比率を全収入の 40%に引き上げ 達成せず。09 年 3 月時点での自己財源比率は、23%。 目標 2: 会員口数を現在の 2 倍に増やす(目標値 221 口) 達成せず。09 年 3 月時点での会員口数は、143 口。

「国際協力 NGO 次世代リーダー育成研修/助成事業」

NGO に関係する様々なステークホルダー(利害関係者)から共感を得、協力を引き出すための「相手を動かすコミュニケーション力の向上」と、活動内容のみならず経営上も安定した団体運営に必要な「組織を動かす基礎知識の習得」を目指す研修事業と、研修修了者を対象とした人件費助成を組み合わせた事業。2005 年度から 5 年計画で実施している庭野平和財団との共同プログラム(JANIC ホームページから参照)。IVY からは事務局員・平松千波(08 年 8 月退職)が 06 年度研修に参加し、助成金審査に合格、07 年～08 年度の助成対象者となった。平松の退職後は、事務局員・堀野正浩が引き継いだ。

■カンボジア部門

1. 08年度方針	カンボジア・スバイリエン州での農村開発プロジェクトの実施を継続。 1. 中発10村に野菜共同出荷の活動を広げる 2. 中間評価を行う
2. 活動計画	1. 女性による野菜共同生産・出荷を通じた農村振興プロジェクト 2. 生命の井戸プロジェクト 3. 新規プロジェクトの検討 4. カンボジアスタディーツアー
3. 実施体制	【部門担当】安達三千代 【IVY カンボジア事務所】 1) 管理チーム: 松浦あゆみ、ブウ・シタ、エル・アン 2) 販促チーム: マ・ソクンティア、メ・ラヴィ 3) 地域開発チーム: ヨーク・サニン、ケン・ブッタ、セン・チャリヤ 4) 農業チーム: ハン・ブティ、トム・サマン、エン・パニー、オン・モニロス、 チャ・クンティア 5) 運転手・警備員: ウン・ボレーク、バン・サルツ、ボン・ボレイ、エン・バイト 【IVY 本部】安達三千代、堀野正浩 【アドバイザー】菅原庄市
4. 結果・成果	1. 女性による野菜共同生産・出荷を通じた農村振興プロジェクト (JICA草の根技術協力パートナー型対象事業) 1) 実験村への調査・評価を中間報告書としてまとめ、共同出荷を選択肢として提供するという結論に至った。 2) 中発村 10 村において計画された全ての研修を行い、共同出荷体制が整った。 3) 中発村 10 村において 38 基の新規の井戸を設置。またポンプ機も 2 台購入した。 4) 経済特区バベットへの週一回の共同出荷が 2 月から始まった。女性組合生産者協会を組織し、リーダーを選出した。 5) 新規 6 村においても 8 つの生産者グループが立ち上がった。 2. 生命の井戸プロジェクト 中発村 10 村において 194 基の井戸を修理した。 3. 新規プロジェクトの検討 3 月に JICA 担当者にバベットへの出荷を視察してもらい、大口への定期的な共同出荷について意見を共有することができた。 4. カンボジアスタディーツアー 09 年 3 月 22 日～28 日に 11 名が参加し、農村ホームステイを堪能した。
5. 課題・次年度に向けて	バベットへの定期的出荷が始まったことで、共同出荷は新しい展開を迎えたが、生産量の不足、求められる高い品質、低い値段、といった問題につきあたっている。こうした問題解決のために NGO としてどう支援できるのかが課題となるであろう。IVY としてもビジネスの支援という新しい分野にチャレンジし、次プロジェクトに向けてこれまでとは違ったスキルを身につけていく必要がある。

■外国人支援部門

1. 08年度の方針	スタッフのやりくりが厳しい状況下、日本語教室・相談・医療通訳など、福祉的色彩の強い活動が縮小しないよう務めるとともに、より多くの外国人を巻き込んでいけるよう広報活動に力を入れる。
2. 活動計画	<p>1. 通訳・翻訳サービス 医療通訳の普及が進まない理由が費用負担なのかをさぐるために、地域と言語を限定し通訳費無料サービスを実施する。</p> <p>2. 日本語支援 日本語教室のスタッフの確保に務める。</p> <p>3. イベント等の開催 日本人が在住外国人の思いを聞く場〈スピーチコンテスト〉、外国出身者が思いを語りあう場〈子育て座談会〉を創出する。</p> <p>4. 法律勉強会 在住外国人や通訳者向けの日常生活に役立つ法律勉強会の開催。</p> <p>5. 子ども中国語教室 教室活動の定着を図る。</p>
3. 実施体制	<p>【部門担当】西上紀江子</p> <p>【スタッフ】五十嵐貞心、桑山幸子、横澤由実、英玉鳳、郭玫珠、山川ようこ、渡辺敏、黒崎敬子</p> <p>中国語通訳者や事務局から黒崎がスタッフとして加わり、広報やHPなどで事務局からのバックアップもあった。</p>
4. 結果・成果	<p>1. 通訳・翻訳サービス 前年度に比べれば多少は通訳依頼が増えたが、県や市に通訳の必要性を訴えられる数値ではなかった。</p> <p>2. 日本語支援 学習者がさまざまな事情で途中増減し、スタッフの方が人数が多いこともあった。</p> <p>3. イベント等の開催 スピーチコンテストは、50名近くの来場者。中国出身のスタッフが企画した子育て座談会では、中国とブラジルのお菓子作りの他に、子どもがいじめにあったときの対応など、小中学校の情報を共有できた。</p> <p>4. 法律勉強会 山形県弁護士会の協力で全4回を県内各地で開催。</p> <p>5. 子ども中国語教室 南山形小学校の協力で全18回。年齢別に2から3クラスに分けて実施。</p>
5. 課題・次年度に向けて	<p>1. 通訳・翻訳サービス: 医療機関は、医療通訳を自分たちが関わるべき問題と考えておらず、サービス普及の障害となっている。</p> <p>2. 日本語支援: 日本語教室の学習者の確保が課題。</p> <p>3. イベント等の開催: スピーチコンテストの財源確保が課題</p> <p>4. 子ども中国語教室: 学校の事情で年間時数が限られており、中国語学習の効果が薄い。財源確保が課題。</p>

■国際理解・環境教育部門

1. 08年度の方針	1. 国際理解教育、環境教育の普及に努める 2. 指導者養成を行う 3. 他団体とのネットワークの推進を図る
2. 活動計画	1. 地球子どもキャンプ 年1回実施(12月) 2. 指導者養成講座実施(年4回) 3. 学校現場、セミナー等への講師派遣 4. 他団体、大学との連携
3. 実施体制	【部門担当】 阿部真理子 【地球子どもキャンプ】 リーダー21名、事務局3名 【指導者養成講座】 外部講師2名、内部講師3名、事務局1名 【講師派遣】 担当者3名、「チーム100人村」10名 *「チーム100人村」はワークショップ「世界がもし100人の村だったら」のファシリテーター勉強会のメンバーからなる。「100人村」は学校からの派遣依頼が一番多いワークショップである。
4. 結果・成果	1. 地球子どもキャンプ 12月26～28日 於:朝日少年自然の家 子ども参加数48名 テーマ「食べもの」 ・リーダー経験のあるリーダーと初めてのリーダーの協力がスムーズであり、昨年より一層リーダーの自主性が高まった。 ・食べ物が地球環境に及ぼす影響や世界とのつながりに、子どもたちが気付き、自分たちの食生活を見直すきっかけとなった。 ・参加応募者が100名近くあり、半数を断ることになった。 2. 指導者養成講座 4回実施。延べ48名参加。 その他、派遣要請のある都度、実践的な勉強会を実施 ・指導者養成講座受講者のうち5名が「チーム100人村」のメンバーとなり、11名がキャンプリーダーとなって活動した。 ・他団体主催のイベントにおいても、3名がファシリテーターとして参加した。 3. 講師派遣 チーム100人村:県内小中高校へ合計7回派遣、IVY 主催ワークショップ1回実施 ・メンバーのファシリテーターとしてのスキルの向上により、若手のチームメンバーのみの学校での活動が可能になった。 4. 他団体、大学との連携 ・国際理解教育実践フォーラム(11/22、AIRY、JICA 東北共催)初めて教員の参加が5割を越えた。講師としても教員が参加。 ・連携先として宮教大が増え、3大学4学部で国際理解教育の講座を実施。
5. 課題・次年度に向けて	キャンプリーダー、チーム100人村のメンバーの半数近くが卒業や就職で山形を離れた。毎年のことであるが、機会を捉えては、新しいメンバーの獲得に力をそそぐ必要がある。

■地球の文化祭

<p>1. 08年度の方針</p>	<p>「世界に目を向けてもらうきっかけ作り」に重きを置き、子どもたちや家族連れが楽しめるお祭りとする。企画準備へのボランティアの参加度を高め、ボランティア主体のイベントにする。目的は以下の3つ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 世界に関心を持つきっかけを、楽しいイベントを通して提供する 2. IVYの活動や国際協力の世界を紹介する 3. 地域に住む在住外国人との出会いの場を作る
<p>2. 活動計画</p>	<p>6月:主催、共催、後援確定、参加団体および協賛金募集開始 7月:広報用ポスター・チラシ完成、ボランティア交流会 8月:参加団体確定、会場レイアウト確定 9月:マスコミ広報、参加団体・ボランティア説明会 10月:マスコミ広報、最終確認 10月5日:実施</p>
<p>3. 実施体制</p>	<p>【部門担当】菅井規郎、堀野正浩 【事務局】IVY事務局から専従1名(堀野)を配置。各種申請手続き、広報、企画委員会の開催、参加団体募集等に関する仕事を行う。当日の統括も兼ねる。【企画委員会】IVY理事および有志ボランティアで構成。イベントの柱となる企画を検討する。【チーム】企画委員と公募したコア・ボランティアで構成。企画委員会で決定した内容を具体化し実行。「企画」「ボランティア」「広報」「事務」の4チーム。【当日ボランティア】当日各セクションに配置され実働業務を行うボランティアスタッフ(約100名)。</p>
<p>4. 結果・成果</p>	<p>1. 山形の国際交流の促進 県内の国際団体、在住外国人団体や料理店25団体が参加、世界の文化紹介や、地域から世界とつながる活動を市民に紹介出来た。また、多くの子どもたちに世界と触れ合うきっかけを提供できた。</p> <p>2. 地域の若者たちが市民活動に参加 地域の若者や大学生を中心とした15名が「企画運営委員会」を組織、11名の「コア・ボランティア」とともに数ヶ月前から企画・準備を行い、イベント運営の原動力となった。当日は106名のボランティアが参加、「ボランティア主導」のイベントを実現出来た。 また開催までの準備プロセスが、地域活動に関わる若い人材の育成の機会になった。「企画運営委員会」では、NPOの理事会方式を取り入れた企画会議や、作業別の実行チームを組織するなど、団体運営の手法を学んだ。また、関係団体との連絡調整、イベント実施のための資金調達(協賛金の依頼)などもボランティアが自ら行った。</p> <p>3. IVYの活動紹介 IVYブースでカンボジア紹介や募金企画などを実施、市民がIVYを知るきっかけとなった。</p>
<p>5. 課題・次年度に向けて</p>	<p>1. 予算の問題 例年赤字決算が続いており、08年度も約36万円の赤字となった。財政負担が大きい事業となってきている。</p> <p>2. 事業効果 山形の国際イベントとして6年目を向かえ地域貢献度は高いが、IVYが理解を促進したい途上国の課題や国際協力の世界、IVYの活動などを効果的に広報できる事業にはなっておらず、見直しが必要。</p>

■事務局

1. 08年度方針	<p>1. ファンドレイジングに本腰を入れて取り組む(2年目)</p> <p>2. 東北に IVY ネットワークを拡げる</p>
2. 活動計画	<p>1. 連絡会の設置</p> <p>2. サポーター拡大</p> <p>3. 外務省 NGO 相談員</p> <p>4. 認定 NPO 法人申請</p> <p>5. インターンの受け入れ</p>
3. 実施体制	<p>【事務局長】安達三千代</p> <p>【事務局員】阿部眞理子、平松千波(08年8月退職)、堀野正浩、黒崎敬子</p> <p>【会計ボランティア】牧野千穂子</p>
4. 結果・成果	<p>1. 連絡会の設置 会津若松、仙台、秋田、盛岡の4か所に IVY 連絡会を設置。各地域世話人の方々と協力し、地元で開催される国際イベントへの出展、国際協力講座、カンボジア報告会、ワークショップ等を行った。</p> <p>2. サポーター拡大 07年度に引き続き、「自己資金比率40%」を目標にファンドレイジングに取り組んだ。企業関係者対象の CSR シンポジウム、夏・冬2回の募金キャンペーン、何でも回収キャンペーン、マスコミや HP での広報、ツール整備など、様々な試みをし成果も残したが、前年度比約80万円の減収、自己資金比率22.5%に留まった。担当事務局員1名の人件費を国際協力NGO次世代リーダー育成助成金(庭野平和財団および JANIC)から助成を受けた。*詳しくは別添の報告書、IVY 機関誌53号「寄付金集まっていますか」特集号参照。</p> <p>3. 外務省 NGO 相談員 1) 外務省からの受託事業。年間約300件の国際協力の相談に回答した他、東北ブロック担当として、これまで手薄だった北東北のうち、岩手県、秋田県の国際団体との関係構築、情報収集などをおこなった。 2) 10月30、31日に IVY が受入団体となって「NGO 相談員全国連絡会議」が開催され、地元東北から34団体・人が参加し、外務省、NGO 団体と意見交換した。</p> <p>4. 認定 NPO 法人申請 08年6月に認定団体となったが、まだ寄付金増に生かし切れていない。</p> <p>5. インターンの受け入れ 1) 山形大学4名(2週間)、山形市立第一中学校 3名(1日) 2) 山形大学人文学部学外実習コース学生 3名受け入れ(3か月)</p>
5. 課題・次年度に向けて	<p>次年度もファンドレイジングが最優先課題。</p> <p>入口メニュー等をきっかけとしたアプローチを重視し、そこからのつながりを丁寧な育て、最終的に会員や寄付に至るプロセスを作っていく。また、このプロセスをシステム化・マニュアル化して、少ない人手で確実に回していける体制を作る。</p>

■機関誌

1. 08年度の方針	<p>【目的】</p> <p>1. 会員、支援者への報告をする</p> <p>2. 活動の記録と分析、振り返りの機会とする</p> <p>3. 広報ツール、活動説明ツール、勧誘ツールとして活用する</p> <p>【読者】会員・支援者、一般・学生、関係機関・ドナー</p> <p>【その他】企業会員・県外会員向けの記事の充実、読みやすい紙面づくり</p>																					
2. 活動計画	年6回発行																					
3. 実施体制	<p>【編集責任者】阿部眞理子、堀野正浩</p> <p>【編集委員】枝松直樹、庄司勉、安達三千代、西上紀江子</p> <p>【レイアウト担当】芦埜朝子、大山めぐみ</p>																					
4. 結果・成果	<table border="1"> <thead> <tr> <th>発行日</th> <th>号</th> <th>特集</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>08/5/20</td> <td>50</td> <td>カンボジア事業「野菜売れてますか？」 有機野菜の共同出荷プロジェクト この1年を総特集！</td> </tr> <tr> <td>08/8/25</td> <td>51</td> <td>スタディツアーのツボ カンボジア編</td> </tr> <tr> <td>09/2/9</td> <td>52</td> <td>「寄付金、あつまってますか？」ファンドレイジング 成果と課題</td> </tr> <tr> <td>09/3/31</td> <td>53</td> <td>第2回日本語スピーチコンテスト きらめく出会いと発見！ 山形で学び、はたらき、子育てをして</td> </tr> <tr> <td>09/3/31</td> <td>54</td> <td>第4回地球子どもキャンプ</td> </tr> <tr> <td>09/3/31</td> <td>55</td> <td>イベントレポート特別号 第6回地球の文化祭</td> </tr> </tbody> </table>	発行日	号	特集	08/5/20	50	カンボジア事業「野菜売れてますか？」 有機野菜の共同出荷プロジェクト この1年を総特集！	08/8/25	51	スタディツアーのツボ カンボジア編	09/2/9	52	「寄付金、あつまってますか？」ファンドレイジング 成果と課題	09/3/31	53	第2回日本語スピーチコンテスト きらめく出会いと発見！ 山形で学び、はたらき、子育てをして	09/3/31	54	第4回地球子どもキャンプ	09/3/31	55	イベントレポート特別号 第6回地球の文化祭
発行日	号	特集																				
08/5/20	50	カンボジア事業「野菜売れてますか？」 有機野菜の共同出荷プロジェクト この1年を総特集！																				
08/8/25	51	スタディツアーのツボ カンボジア編																				
09/2/9	52	「寄付金、あつまってますか？」ファンドレイジング 成果と課題																				
09/3/31	53	第2回日本語スピーチコンテスト きらめく出会いと発見！ 山形で学び、はたらき、子育てをして																				
09/3/31	54	第4回地球子どもキャンプ																				
09/3/31	55	イベントレポート特別号 第6回地球の文化祭																				
5. 課題・次年度に向けて	発行スケジュールが遅延。タイムリーな報告が出来なくなっている。他の広報媒体などとの差別化、記事内容の再検討が必要となっている。																					

■収益事業

1. 08年度の方針	委託販売先の開拓、イベント等での販売などで収益増を目指し、団体の自己資金の増に貢献する。
2. 活動計画	<p>1. ハングルを使う人のための生活漢字テキスト販売</p> <p>2. アジア手工芸品販売</p>
3. 実施体制	<p>1. ハングルを使う人のための生活漢字テキスト販売</p> <p>HPを通し宣伝を行い、事務局で販売と発送を行なう。</p> <p>2. アジア手工芸品販売</p> <p>手工芸品はすべてチャリヤから仕入れ、スカーフは駐在員がカンボジアで購入した。事務所での販売の他、販売委託先の大正館（宮城県大崎市）、名月荘（山形県上山市）、志鎌園（山形市）で販売。フェアトレード商品、原料のはっきりした商品を販売するという方針のもと、原料、染料をはっきりさせた上で販売し、商品説明のパンフレットには製作現場の写真を載せ、買っていただく方に商品の特性をより理解していただけるよう努めた。</p>
4. 結果・成果	売上総利益 69,297 円
5. 課題・次年度に向けて	アジア手工芸品:販売委託先からの提案(客層の好み、商品に対する改良点)を、作成者側に伝え、商品に反映させることでさらなる売上げ増を目指したい。